

芭蕉蔵

優秀作品発表

第12回

兼題「虫」の部

特選第一席

虫の秋ともあれ我は生きている

仙台市

中澤敏泰

特選第二席

孤独なる点取虫の夏休

千代田区

野尻正雄

特選第三席

捕虫網小さき男の子を振り回し

横浜市

吉田みち

【講評】

今回の兼題「虫」は、秋の季語としての「虫」以外に、「泣き虫」「水虫」「昆虫記」「腹の虫」等々、幅広く用いられていたため、楽しく選句することができました。ただ、季語「虫」を無理に取り合わせた作品も散見されました。季語は、他に変えようがない（俳句では「季語が動かない」と言います）、というところまで検討した上で投句したいものです。

特選第一席、虫の鳴く秋の到来。その声を聞いていると、過去の紆余曲折が思われるものの、今ここにこうして生きていることを改めて実感せずにはいられないのです。作者は仙台市の方。東日本大震災を経験しての率直な思いかも知れません。この句の場合、「虫の秋」が実によく効いています。

第二席は、兼題から意外な発想を導き出して成功した例です。学校では首席なのかも知れませんが。成績のためには友達づきあいも断ち、一人寂しく勉強を続ける生徒の様子が思われます。夏休みとなれば、より一層その孤独は深まることでしょう。他ならぬ自分のために頑張つて欲しいものです。

第三席は、男の子が、小さな体で捕虫網を一生懸命に振り回している様子が描かれています。それを逆転の発想により、捕虫網が子供を振り回していると表現した点がユニークですし、よく見える句にしています。柄の長い虫を取り網と、それにしがみつくかのようにして虫を追いかける小さな男の子。夏の一コマが臨場感をもって描かれています。

【入選】

- 泣き虫の虫歯あらは夏夏の空
割箸に挟み毛虫のうすみどり
秋灯や机の上の虫眼鏡
辻ごとに虫の音たがへ城下町
鈴虫のふと鳴き止めば待つ心
斑鳩に玉虫厨子九月尽
みの虫は風を食べると言ふ子ども
- 練馬区 伊藤たか子
- さいたま市 笠原くに
- 横浜市 永易幸茂
- 東久留米市 夏目 忠
- 習志野市 本城宏基
- 調布市 水谷友二
- 台東区 目崎純子

【添削例】

- 泣き虫も子の親となり孟蘭盆会
(原句)
- 孟蘭盆会あの泣き虫が子を連れて
(添削句)
- 芋虫の羽化の手品や蝶となり
- 芋虫の手品のごとく蝶となる
- 松虫草遠き穂高の嶺見せず
- 松虫草つひに穂高は嶺見せず
- 二つ目のさらりと脱げぬ夏羽織
- 二つ目のなかなか脱げぬ夏羽織
- 二つ目のなかなか脱げぬ夏羽織
- 豊作や手塚治虫のベレー帽
- 豊年や手塚治虫のベレー帽
- 虫好きな少年に夏休み
- 虫好きな少年に夏来たりけり
- 坊泊りの浅きねむりや残る虫
- 虫の音や眠りの浅き坊泊り
- 喪の家の帰り道にも星流る
- 喪帰りの道のなかなかの流れ星



西山春文

選句・講評

「狩同人」俳人協会幹事
日本文藝家協会会員
本学商学部教授

自由題の部

特選第一席

地震つづく夜に泡立つ水中花

伊勢原市 中本萬里

特選第二席

地震あるも戦なき国鳥渡る

横浜市 永易幸茂

特選第三席

櫓組む顔ぶれ揃ひ夕焼雲

調布市 水谷友二

【講評】

自由題の特選第一席は、ある意味で最近の時事俳句と言えるかも知れません。今年には震災を詠んだ俳句が多数見られますが、最短詩形である俳句は出来事を伝達するには不向きです。ところが、掲句ではあくまでもテーマを水中花としているために、無理なく伝わります。小刻みに揺れ、泡を放つ夜の水中花には、不気味な美しさがあります。これ以上の余震が来ぬことを祈るばかりです。

ずを読むことができます。地震は大地の自然の摂理。ところが、戦は人為的なものゆえ、二度と起こしてはならないという祈りが込められています。鳥が渡ってくるのは平和の証だということにも気づかれます。

第三席では、盆踊りのための櫓を組もうとしているのでしょう。郷里を離れ暮らす人々も、この時ばかりは必ず帰省し、連れだってやって来るのかも知れません。背景に広がる夕焼雲(夏)が美しく輝いています。

【入選】

踏切の音の響きや秋初め	町田市	牛島興成
襟足を刺り新しき浴衣かな	松戸市	加藤浩雲
鯛や遊び疲れし児を背負ひ	文京区	杉山保廣
脱稿の深き眠りへ水中花	伊勢原市	中本郷顔
子が継ぎし乱読の癖夜長かな	東久留米市	夏目 忠
盆踊村に一人のへうげもの	千葉市	馬場由紀子
しづしづと従姉妹の樞天花野	台東区	日崎純子

応募方法

- 1 応募用紙を明治大学ホームページからダウンロードするか、あるいはA4用紙に次のことを記載の上、郵送・ファックス又はメールで応募してください。
http://www.meiji.ac.jp/koho/desukara/info_book/zasshi_bashoukura.html
- 2 未発表作品に限ります。
- 3 自由題と兼題のそれぞれ2句まで応募できます。応募は無料です。
- 4 自由題と兼題、どちらかを○で囲む、あるいは記してください。
(1枚の用紙に自由題と題詠の併記は不可)
- 5 住所・氏名・電話番号・作品等、必要事項を記入してください。
※ペンネーム(番号)の場合も、必ず本名を併記してください。
- 6 文字は楷書で記してください。
- 7 応募作品は返却しません。
- 8 特選に選ばれた方には特製図書カードを贈呈いたします。

応募先 明治大学経営企画部広報課 芭蕉蔵係
〒101-8301
東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL03-3296-4083 FAX03-3296-4087
MAIL koho@emics.meiji.ac.jp

次号兼題 「冬の月」あるいは「寒月」
11月15日必着